

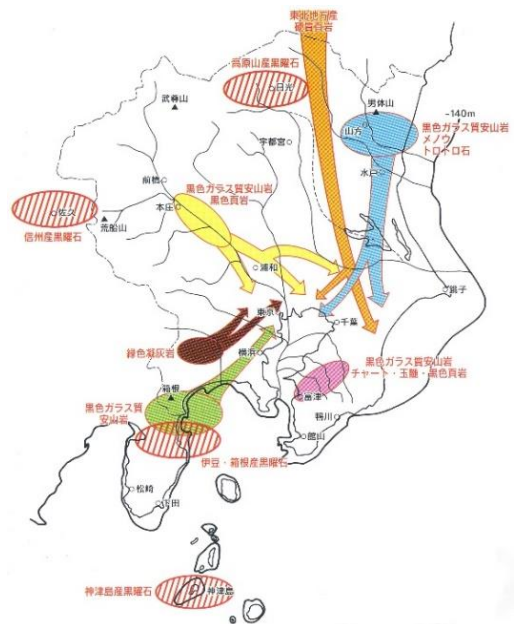


考古学が対象とする最も古い時代は、およそ 4 万年前から 1 万数千年前までの旧石器時代です。この時代で遺跡から出土する道具は石器です。千葉県はこの時代から環境と資源に恵まれ、多くの人々が暮らしていたため、遺跡が数多く見つかり、発掘調査でたくさんの石器が出土しています。しかしながら、石器を製作するのに適した石材は乏しく、遠く離れた原産地から調達した貴重な石材を活かして再加工や補修を行うなど、限られた資源を有効活用する知恵や工夫がされていることがわかりました。

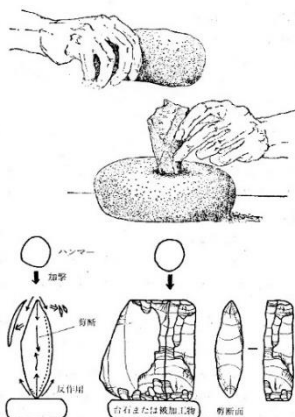
印西市荒野前遺跡出土石器他に見られる「下総型石刃再生技法」は、東北産の硬質頁岩を素材とした大型石刃の縁辺を頻りに再生し、刃部の更新を行っていることに特徴があります。さらに、再生時に生じた剥片や小石刃をも再利用しており、良質な石材に乏しい地域ならではの「究極の石材利用」といえ、「Reduce」(＝ゴミをなるべく出さない)と「Reuse」(＝そのままの用途で繰り返し使う)を、石器から読み取ることができます。

「下総型石刃再生技法」が用いられた時期とほぼ同時期に、石材が乏しい下総台地固有の技法である「遠山技法」があります。この技法は遺跡付近の砂礫層から抜き出した小円礫を素材とし、それを台石に立てて敲き石で割り、小さく薄い素材剥片を作出するもので、横芝光町遠山天ノ作遺跡の出土石器を基に命名された技法です。成田市東峰御幸畑西遺跡他で出土しています。石器原産地であれば見向きもしない、台地の基盤層に含まれる硬質の小円礫を究極まで消費・利用している点で、石材の乏しい石器消費地での知恵と工夫が見られます。

旧石器時代の終わり頃には狩りの道具として細石刃を使った道具が登場しました。細石刃は長さ 3～4 cm、幅 0.5cm 程度の小さく細長い石片で、骨や角などで作られた細長い軸の側面の溝に埋め込まれ、組み合わせ式の槍やナイフとして使われました。これを植刃器しよくじんきといいます。残念ながら植刃器の軸は発見されていませんが、細石刃は多古町一ツ塚遺跡他で出土しています。細石刃以外は、再加工が限界に達すると、そのまま捨てられましたが、植刃器は細石刃の交換が自由な「替刃方式」なので、部分修理が可能でした。さらに、最終末には、植刃器の形態を模した細身で両側縁が平行する「本ノ木型尖頭器もとのき」が登場しました。四街道市木戸先遺跡の「本ノ木型」はその好例です。長さに一定の規格性がありますが、必ずしも当初からこのサイズを企図したわけではなく、折損後に再加工が行われた結果、小型化(寸詰まり)したようです。



石材の原産地とその流通



遠山技法



細石刃を用いた替刃方式の植刃器



本ノ木型尖頭器